

台湾に於ける対外国人中国語教育を通して：「注音符号」と台湾国語

横山，裕
九州大学大学院

<https://doi.org/10.15017/18149>

出版情報：中国哲学論集. 20, pp.90-96, 1994-10-10. 九州大学中国哲学研究会
バージョン：
権利関係：

台湾に於ける対外国人中国語教育を通して

——「注音符號」と台湾国語——

横 山 裕

はじめに

本報告は平成五年三月より台湾で中国語習得の機会を得た筆者の直接的経験に基づくものである。筆者は学部教養過程で中国語を選択し、その学習経験の延長線上にこの台湾での中国語学習を位置づけていた。しかし、実際に台湾で中国語授業に参加すると、すぐ台湾での学習はそのまま日本での学習の延長として位置づけられないことに気付かされた。それは日本国内か台湾かという授業が行われる位置的な違いに起因するのではなく、学習対象となる中国語の違いに起因する。つまり、教養過程で学習した中国語が中華人民共和国（以下中国）の普通話に基づくものであるのに対して、台湾で学習対象となる中国語は中華民国の国語だからである。したがって筆者の如く普通話の学習後、国語の学習に当たった者は、両中国語のズレ（発音、声調、意味等）に戸惑いを覚えざるをえないが、その中でマイナス面だけではなく学習方法として新たな感動にも似たプラス面の発見もある。そこで、本報告では、日本で普通話学習の経験を持つ者が留学先として台湾を選び、国語学習を通じて中国語の研鑽を積む場合の優点及び問題点について論じたい。ただ、始めに台湾留学の情報は中国への留学ほど周知されていないので、まず簡単に紹介しておく。

台湾の大学へ正規の学生として学位取得を目標とせず、半年～二年の期間で中国語の習得を目標とするとき、大学間で取り決めた交換留学生以外では教育部認定の中国語学校に籍を置く方法しかない。現在、台湾大学、師範大学、輔仁大学、逢甲大学、東海大学、成功大学が大学の別組織として、また国語日報が中国語学校を持つている。この中で規模が大きく歴史を有するのは、国立台湾師範大学国語教学中心（以下国語中心）、国語日報である。またこれ以外に日本企業の語学研修生の主要派遣先になっている中華語文研習所(Taipei Language Institute. 以下TLI)も有名である。

国語中心は、約千五百名（七月現在）学生が在籍し、内訳は韓国籍40%日籍30%欧米系（華僑を含む）20%その他10%である。生徒数が他校より群を抜いて多いのは、在校四ヵ月後に居留ビザを取得できるからである。他校は二ヵ月の停留ビザの二回延長のあと、一度台湾外に出て再度停留ビザを取得して来なければならない。居留ビザを取得するとその必要はない。従って、おもにTLIで語学研修をしている日本の企業研修生も国語中心に籍を置いている。

授業時間は国語中心は一日二時間、週五日で三ヵ月を基本的な一学期とする。これ以下だとビザの延長が出来ない。国語日報、TLIは時間を自分で決めることが出来る。テキストはレベルに応じて30種類程あるが各校ほぼ共通であるため、どの学校でも初対面の先生には決まってどの教科書が学習済かを質問される。

一クラスの人数は国語中心、国語日報は3～5人、TLIは個人授業が中心である。授業経営はどこもすべて教師にまかせられており、学校全体で統一はとれておらず同一テキストでも進度、授業内容はまちまちである。

筆者は中国哲学史を専門とするので一定のレベル到達後、専門に関する中国語の学習を望んだが、希望者が少なく開講されていなかった。これに対して所謂商業中国語はあらゆる授業が開講されており需要の違いを痛感させられた。

留学先としての台湾の利点は、生活環境が日本と大差無いこと、親日的な人が多いこと、また中国哲学史を研究するものにとつて見慣れた旧字体（繁体字・台湾では正体字）であること等が挙げられるが、なにより純粹に中国語習得の上で最大のプラス面は「注音符號」による発音表記である。

「注音符號」は清末から盛んになった教育の普及を目的とする文字改革「簡字運動」が中華民國に引き継がれて、民國七年に「注音符母」として教育部より正式公布され、その後幾つか改良が加えられ民國十九年「注音符號」と名称が改められた一種の発音記号である。特に中華民國政府が台湾に渡つて後は國語推行教育の中心手段として広く用いられ、現在の台湾では中国人、外国人を問わず中国語教育とは不可分となつてゐる。

「注音符號」は、古文篆籀をもとに作られており声母、介母、韻母からなる。現在常用される「注音符號」は次の通りである。

声母 二十一個 () 内はモデル字

ㄅ (包) 布交切 ㄆ (支) 普末切 ㄇ (暮) 莫狄切 ㄊ (ㄊ) 府良切
 ㄊ (刀) 都勞切 ㄋ (突) 他骨切 ㄌ (乃) 奴亥切 ㄍ (力) 林直切
 ㄍ (澹) 古外切 ㄎ (巧) 苦浩切 ㄆ (尸) 呼旱切 ㄇ (料) 居尤切
 ㄎ (吠) 苦鄧切 ㄊ (下) 胡雅切 ㄋ (之) 真而切 ㄌ (彳) 丑亦切
 ㄆ (尸) 式而切 ㄇ (且) 人質切 ㄋ (節) 子結切 ㄌ (七) 親吉切
 ㄌ (私) 相姿切

介母 三個

ㄨ (一) 於悉切 ㄨ (五) 疑古切 ㄨ (口) 丘魚切

韻母 十三個

ㄚ (ㄚ) 於加切 ㄛ (呵) 虎何切 ㄜ () 此の符號は民國七年の制定當時はなく、ㄜとせに指摘された表音上

の欠陥を改めるべく民国九年に新たに「注音符號」に加えられたものである。「漢語拼音方案」での〔e〕にあたる。
 せ…(也) 羊者切 芳…(亥) 胡改切 へ…(へ) 余之切 么…(么) 於堯切
 又…(又) 于救切 ㄉ…(ㄉ) 乎感切 ㄎ…(隱) 於謹切 ㄨ…(尅) 烏光切
 ㄥ…(肱) 古薨切 儿…(人) 而隣切
 民国十一年に声調記号が現行のものに決められ(一声、無し 二声、／ 三声、✓ 四声、／ 輕声、・)さらに、二十年に声調記号が各単語に付けられた記号の最後に位置する符號の右上に付ける(輕声は記号の前)ことで統一された。例えば、阿はY 陳はㄉㄉ 点是ㄉㄉ 向はエㄛ 好的はㄉㄨ 勿さとなる。日本の振り仮名を想起させるが、「注音符號」は実際にその制定過程で仮名を参考としているのである。

それでは、「注音符號」を使用した中国語教育の優点はどこにあるかと言えば、発音習得にあり、換言すればローマ字表記でない点にある。日本で中国語教育に従事する学者からしばしば指摘されるように、日本人の中国語学習者は「漢語拼音方案」のローマ字表記をいわば日本的ローマ字感覚で認識し、発音が不正確になりがちである。一方、「注音符號」はそういった先入感覚とは無縁であるため、各符號(計三十七個)さえ正確に発音を体得すれば全ての漢字の正確な発音が可能である。また、「漢語拼音方案」ではその表記法上に出現しない音がある。勿論、それが規則なのだからそれを理解しないのは学習者の怠惰と言うことが出来るが、学習上の便宜という視点で見れば「漢語拼音方案」の欠点ともいえる。「漢語拼音方案」を使用したために生じる問題を「注音符號」で解決できる顕著な例を幾つか挙げてみたい。

- ① y及びwが頭にあるものをローマ字する問題。例えば、ye, yao, youをエ、ヤオ、ヨウと、wa, wo, waiをワ、ヲ、ワイと読むこと。これはy及びwが〔i〕,〔u〕と意識されにくいからである。「注音符號」では、
 ㄩはye→ㄩ wa→ㄨㄛ ㄩ必ず「ㄨ」を表記する。
- ② eの区別の問題。例えば、de, te, neㄉㄛ, ㄊㄛ, nieでは表記上はともにeであるが発音上は〔e〕,〔e〕と異なった音である。「注音符號」では〔e〕→ㄉㄛ〔e〕→ㄊㄛと必ず異なる符號で表記される。
- ③ uについて。例えば、ju, qu, xuㄐㄩ, ㄑㄩ, ㄒㄩと、ku, huㄎㄨ, ㄏㄨも表記上はㄐㄩ, ㄑㄩと異なっ

た音である。「注音符號」では [ㄉ] ↓ [ㄊ] [ㄉ] ↓ X となり完全に区別される。

④ [iou] [uei] が前に母声をもつときはそれぞれ [o] [e] の音が表記上に現れない。例えば *jiu*, *qiu*, *xiu* 及び *dui*, *tui*, *gui* となりジウ、チュウ、シュウ及びドウイ、トゥイ、クイと発音されかねない。「注音符號」では [iou] [uei] は一又、Xへと表記され X ↓ [ou] へ ↓ [ei] の表音符號であるから [o] [e] の音が欠落することはなご。

⑤ [uen] [ün] が前に母声をもつときは、例えば *dun*, *un*, *nun* 及び *jun*, *qun*, *xun* の如く表記されるが、これだと③で指摘したように [ㄨ] と [ㄩ] の区別が表記上に現れない。さうに両者は共通して [e] の音が表記上から欠落している。「注音符號」では [uen] ↓ Xu [ün] ↓ [u] と表記され、例えば *dun* ↓ ㄉㄨ Xu [un] ↓ ㄨ となり、[ㄨ] と [ㄩ] の区別も [e] の音も符號上に現れる。「漢語拼音方案」で [ㄨ] や [ㄩ] の音が表記上に出てこない欠点は [iong] や [ong] にも当てはまる。これらは表記上に o を有するがその実はけっして「オ」ではない。「注音符號」では [iong] ↓ ㄩㄥ [ong] ↓ X となり明確に表記され、「オ」という誤解は生じない。

以上の如く、「注音符號」は発音表記に関して「漢語拼音方案」よりも遙かに優れていると言えよう。従って、日本における中国語教育に於ても確かに普通話と國語の差はあるが、発音指導で「注音符號」は活用されるべき価値が十分にあると思う。

三

次に台湾に於ける中国語習得上気になる点についてであるが、これは台湾國語と普通話の差異である。國語は本来、主に北京官話をもとに制定されたものだが台湾で推行され使用されていくうちに、台灣語の影響を受け變化した。これを台湾では台灣國語と言う。中国語学校では國語を標準とし台灣國語は不標準とするが、学校外では殆どといっていいほど圧倒的に台灣國語が主流である。そこで、校外の実戦練習で多くの留學生は戸惑うことになる。台灣の中國

語（国語及び台湾国語）と普通話との差異を発音、声調、意味の三点から紹介したい。

発音であるが、先述の如く台湾国語は閩南語系に属する台湾語の影響を大きく受けており以下三つの特徴がある。⁴⁾

(1) 翘舌音 zh, ch, sh, r があまり舌を巻かず、zh, ch, sh ち zi, ci, si r ち zi をしくは ji と区別がくまらくない。例えば四と十はともに si と発音され声調で聞き分けるしかない。(2) 唇歯音 f が日本語と同じく下唇が噛まれないため、ときに舌根音の h と聞き分けにくい。例えば、会話と廢話、発と花等。(3) 撮口呼の u の音がなく、u とあまり区別がない。これは一の音と関係するので生活上本当に紛らわしい。例えば、一塊と愉快、一次と魚刺等。ただ、聞き慣れると状況から単語の識別が出来ないということはない。

次に、声調の問題であるがこれは普通話との差異である。日本で出版される中国語の辞書は普通話を基準にしていることから、台湾の教師としばしば討論の材料になる。授業中に台湾の教師に誤りだと指摘され、その実、日本の辞書（中日大辞典・大修館書店）と違っていた例を挙げてみたい。例（国語）（普通語）

成績 (chéngjì) (chéngjì) 危険 (wéixiǎn) (wéixiǎn) 常識 (chángshí) (chángshí) 品質 (pǐnzhì) (pǐnzhì) 寂寞 (jìmò) (jìmò) 突然 (tūrán) (tūrán) 研究 (yánjiū) (yánjiū) 法国 (fǎguó) (fǎguó) 可惜 (kěxī) (kěxī) 古跡 (gǔjì) (gǔjì) 建築 (jiànzhù) (jiànzhù) 鞠躬 (jūgōng) (jūgōng) 曙 (shǔ) (shǔ)

この他に例えば垃圾 (lèse) (lājī) の如く発音そのものが異なるものもある。勿論、これらは一方が標準で一方が不標準というのではなく単に国語と普通話の違いである。ただこれらについての討論は、時に政治性を帯びてくる可能性があるので注意が必要である。

最後に意味であるが、これは用語の使用習慣が違うくらいで慣れれば問題ない。例えば、台湾では「説」「明白」より「講」「懂」が常用され、「愛人」は日本語と同じ意味になるので「太太」が用いられる等。これらは辞書で間に合うが台湾国語になると辞書が役に立たず厄介である。しかし、日本語が語源のものもあり親しみも感じる。よく使われる台湾国語の例を挙げておく。

塞車…渋滞 載…人を送る 三八…おてんば 飆車…暴走 蹺課…授業をさぼる 休閒活動…レジャー 抓狂…半狂乱 芭樂票…空手形 牽手…配偶者 大哥大…携帯電話

日本語が語源のものは、日本語↓台湾語↓国語と伝わった語が大部分である。例えば、甜不辣：てんぷら 黒輪：おでん 便當：弁当 運將：運転手 欧巴桑：おばさん 等。勿論、甜不辣も黒輪もそのものは日本のと似て非なる物である。その他外来語（台湾英語も含む）を語源にするものには、T恤：Tシャツ K書：貸し勉強部屋 酷：cool 秀：show 秀逗：shoot(馬鹿になる) 等。最後の秀逗は英語↓日本語↓台湾語↓国語と伝わったもので台湾和製英語と言えようか。

社会の発達及び西洋指向が強まるとともに国語の新語彙は増加する一方であるが、それが普通語との差異の拡大につながるかどうかは今後の中国、台湾関係次第であろう。

おわりに

台湾で国語を、中国で普通語を習得しても現在では多少の差はあるが中国語を習得することであり、どちらがよいとは一概には言えない。ただ、発音学習においては「注音符號」が、中国古典を読むにおいては繁体字の中国語が効率的であり、この点に於いて台湾での中国語習得は有利である。言語環境的には台湾国語や台湾語そのものが気になるものの、これはどこに留学しても程度の差こそあれ同じことであろう。標準の中国語を学ぶことが勿論第一目標であるが、それ以外に、台湾国語や台湾語等の現地生活に根ざした日本では学べない言葉とその文化ともども理解習得することも言語留学の大切な学習目標とすべきであろう。以上が台湾留学での実感である。

〔注〕

- (1) 国語日報は新聞も発行する出版社であり、国語推行的の中心的存在の一つである。
- (2) ビザについては度々法改正があるのでくれぐれも注意が必要である。
- (3) 「注音符號」の発音表記上の有効性に言及する論文として、明木茂夫氏「現代中国語の各種音声表記法について―その中国語授業の発音指導への応用」(中国文学論集第20号)がある。参照されたい。
- (4) その他台湾国語の特徴として兒化と輕聲が少ないことが挙げられる。